地方都市における緑地問題解明のための基礎的研究　I

——森林環境に対する住民の意識調査——

橋　本　久　代
信州大学農学部　森林経理学研究室

はじめに

高度経済成長期以降，我が国において，多くの地方都市での“都市化”が著しく進行し，それにともなう地方都市の生活環境悪化が問題として指摘されるようになってきた。そしてその生活環境悪化の一側面として，地方都市においても緑地問題をとりあげ，保全を考える必要性があると指摘する動きが出てきた。[4)8)] 一方，地方都市の市街地周辺部には広い面積にわたって森林がひろがっているが，それらの大半は農家によって所有されている個人所有林であり，その所有規模は極めて零細であって，林業は農業あるいは他産業の従属部門として位置付けられている。[2)] 更に近年経済のいちじるしい発展にともなう就業構造変化は，国産材生産に大きな低迷を招き，林業経営全体の意欲を減退させている。[2)] このように地方都市においては一方では生活環境の問題化として緑地問題がとりあげられているが，他方，広面積を占める市街地周辺部の森林においては林業的問題がクローズアップされてきているのである。

一般に地方都市は緑地が豊かであると考えられている。しかしその緑地をめぐって，

イ）　都市化の進行にともなう環境・休養緑地の減少という面での問題

ロ）　生活の都市化にともなう人間と緑地との関わり方としての問題

ハ）　生産緑地における農林業的問題

などが混在し，地方都市独自の緑地問題を生じさせている。しかし，

イ）“緑が豊かである”という量的な豊かさに隠されて，問題が問題として顕在化していないこと

ロ）“緑地”に対する住民の考え方が多様であるため“住民”を一律的にとらえることができないこと

ハ）“地方都市”と総称されているものの，個々の都市それぞれ個別的な問題があるので，全体的にとらえ難いこと

などのために，地方都市の緑地問題というものは，その課題意識が低いものになりがちである。ここで，地方都市の緑地問題を稀薄化させている諸要因について，簡単に説明しておこう。

まず第一の要因である“緑が豊かである”という量的な豊かさに隠されて，緑地問題が問題として顕在化し難いことについて述べよう。大都市において緑地は量的に激減し，消滅しかかっている。したがって，大都市の緑地問題はまず環境・休養緑地の減少＝生活環境の悪化として顕在化している。しかし，地方都市においてはその周辺部には森林などが豊かに存在しているので，量的な問題としての緑地問題は提起されにくくなっている。しかし実際には，地方都市においても緑地は，都市化の進行にともなってスプロール的に破壊されており，こと森林に関しては，林業的な問題をかかえており，地方都市においても量的な緑地問題が生ずる危機は近くに存しているのである。またそれと同時に人間の緑地に対する意識，利用形態，利用要求といった緑地と人間との相対的関係から生ずる質的な面での危機はすでに存じているのであるが，その危機も緑の量的豊かさによって目立たないものにさせられてしまっている。

このように大都市の緑地問題は“生活の悪化”という形で取りあげられていて，明確な問題性が示されているが，それに対して地方都市においては，何が問題なのか，何の問題として取りあげてよいのか不明確なまま残され，課題意識がどうしても稀薄になってしまっている。

次に第二の要因である“緑地に対する住民の立場が多様であるため，住民を総括的にとらえられないこと”について説明しておこう。

現在大都市において緑地は休養の場・良好な環境を維持する場として重要視されている。それに対して農山村において都市住民が緑地と称する森林や田畑は生産緑地であって，生活基盤・労働の場でもある。したがって大都市や農山村においては，住民の緑地に対する立場はそれぞれある程度一様的であり，緑地と住民の相対的関係も，それなりのまとまりがあると考えてよい。しかし，地方都市においては，都市的な面と農山村的な面が混在しており，“緑地”に対する住民の立場が多様であるため，緑地問題を考えていく際，考慮に入れなければならないことが多面的にならざるを得ない。

最後に第三の要因である“地方都市が個々の都市の総称であり，各々の都市は異った特性を有する個別的なものであること”について，述べておこう。

すなわちある地方都市における緑地問題は，他の地方都市すべてに共通するものではなく，各々問題をとらえる視点は個別的なものである。またそれは，普遍化され難いものだけに，問題の正当な設定を困難なものにしている。

地方都市の緑地問題を考えていく際，以上のような要因によって，問題の所在が不明確にされているので，大都市で今日問題とされて論議されている緑地問題の課題意識・指向方向を，地方都市にそのままの形で導入することは無意味なことと考えられる。地方都市にはその特性を踏まえたうえでの問題設定が必要であり，地方都市独自の指向方向を考えていく視点が必要であると思われる。この場合まず第一の課題として考えられるのは，上述したような量的な豊かさによってかくされている危機性がどこに所在しているのかを示し，地方都市の緑地問題を提起することにあろう。第二の課題として考えられるのは，危機性の原因を多様な面から解明していくことであろう。この原因は必ずしも単純ではなくさまざまなレベルの要因，あるいは同レベルにおけるさまざまな要因が複雑に関係し合ったものであるため，この課題においては個々の原因についての問題解明とともに，原因となっている要因の全体的構造をとらえていく必要があると思われる。

以上のような視点から地方都市の緑地問題を究明していくにあたって，地方都市の緑地として重要な地位を占めていると考えられる森林をとりあげ，"森林に対する住民の意識の中に地方都市の緑地問題の危機性が内在する" という仮説をたて，地方都市の緑地問題を解明していくことを目的とする研究に着手したが，本報告ではまず地方都市においての "森林に対する住民の意識" を明らかにし，住民の意識から地方都市の緑地問題設定を試みたのである。

I　意識調査の設計

地方都市における緑地問題の指向方向を追求していくためには，地方都市の森林の量的な豊かさの裏に内在する質的な危機性を提示しなければならないであろう。

そのような質的な危機は，林相，森林面積，施業形態等森林の様子そのものにあるかもしれない。しかしどのような内容の森林であろうと，それに関わる人間の意識や考え方が森林の方に向っていない限り，緑地保全を考えていく意味はないであろう。そこで，この質的な危機性の根源が森林に対する住民の認識，ひいては森林と人間のかかわり方に内在していると考え，地域住民の森林に対する意識調査を行なうことにした。

本章では，その調査方法について述べていくことにする。

§1　意識調査に内在する基本的問題点

人間の意識を把握することは，非常に困難である。というのは，まず人間の意識は，何らかの形で果してとらえ得るものなのか，あるいはまた何らかの形で得られたとしても，人間の所有する意識と調査によって得られた意識は一致するものなのか，という疑問から生じている。人間は常に頭の中で形にならない意識を有している。しかしあらたまって質問された場合，人間は再考し，意識を形あるものとして表面化する[9] と言われている。したがって常に有している意識が，文や言葉や記号によって果して表現され得るかというと非常に疑問である。また人間は物事を評価・判断する場合，多くの評価・判断基準となる軸を有している[9] と言われる。したがって，"……は好きですか。" という質問について，ある場合は好きでも，ある場合は嫌いだということもしばしばあり得るであろうと思われる。したがって，意識調査を設計するにあたっては，アンケート項目を設定する際にも，調査を実施する際においても，また調査結果を整理していく場合においても，常に次のことを考慮している必要があろう。

すなわちまず第一に必要なことは，アンケート調査の結果として得られた数値を，客観的に見ることのできる絶対的なものとして考えないで，問題を考えていく際の資料として位置付けることであろう。すなわち何パーセントの人が1の回答をしたからという理由でものを言うのではなく，数値も相対的なものと考え，回答の少なかった設問，あるいは回答できにくい理由を書いてくれた文章等を大切に取り扱い，考えていくための重要な資料として位置付けなくてはならない。

第二に必要なことは，項目を設定する際にひとつの聞きたいことに対して様々の面からの質問を設定することであろう。人間は，同じことについて聞かれても，異った視点から聞かれると，違った回答をする場合がある。[9] これは，人間の意識を把握しようとする際の根本的

な問題であるため，様々な面から質問を重ねることにより，回答の意味をより深く考えていく必要があるであろう。

第三に必要なことは，項目を設定する際に，はい―いいえ　形式の他に，できるだけ自由記述の項目を設定することであろう。

第四に重要なことは，このアンケート調査を何のために行なうのかを住民に示し，その判断基準軸に立って回答してもらえるように努力することであろう。

§2　調査対象の選択

森林に対する住民の認識，利用現状，利用要求を明らかにしていく場合，森林を基軸にとるか，住民を基軸にとるかによって調査対象の選択に関して次の2通りの方法が考えられる。ひとつはある森林を限定し，その森林の利用者に対して調査する方法であり，他のひとつはある地域を限定し，その地域の住民を調査対象とする方法である。ある森林を限定し，その森林の利用者を対象として行なう方法は，特定の利用―たとえば木材生産や休養的利用等―ごとにその実態を調査していくには詳細な解明を可能にする。しかしある森林の利用者に限定することによって，森林とかかわりを有していない住民，具体的に森林を利用していない住民の森林に対する認識を知ることは不可能であり，森林と人間の総合的なかかわりを考察していく資料としては，不適当である。一方，地域を限定し，その地域の住民を対象として行なう方法においては各利用ごとの詳細な解明は望めない。しかし森林と人間の相対的かかわりを，多面的に，あるいは総合的にとらえるには，適した方法であると判断できる。

本研究においては，森林に対する住民の多面的な意識をとらえることを目的としているため，森林に対して様々のかかわりを有する住民を含んでいる地域を限定し，その地域の住民を対象に調査を行なうこととした。

§3　調査方法の選択

森林に対する住民の意識調査を具体的に実施する場合，聞きとりによる調査と，アンケートの郵送による調査が考えられる。

聞きとり調査は，対象者本人から詳細に聞くことができ，その時その人の状態を見ながらそれに対応してより深い調査が可能である。しかし，質問者と回答者が直接接触することにより，上に述べた利点がある反面，質問者が回答者を誘導する恐れがある。また，個別的に調査するため，時間的な意味から考えて調査対象者を少数にせざるを得ない欠点がある。

一方郵送による調査は，回収率が悪いであろうし，また選出した対象者以外の人（たとえば対象者の家族）が回答する場合が生ずるであろう。また回答者との直接的な接触がないため，その時の状況に即応した考慮的な調査は望めない。しかしその反面，相手の回答を誘導することはない。また，時間や調査員数が少なくてすむことも，郵送による調査の利点であると言えるであろう。

本研究においては，より多くのより多様な住民の意識を知る必要があるため，アンケートを郵送する方法によって調査を行なうこととした。

§4　アンケート項目の設定

森林環境に対する意識調査

信州大学農学部 森林経理学研究室

（該当する番号を○でかこむか，必要事項を記入するかして下さい。）

問1　あなたは森林は何のためにあると思いますか。最も重要だと思うものから順に番号をうって下さい。
（　）治山・治水　（　）空気・水の浄化　（　）休養的利用
（　）木材生産　（　）鳥獣保護　（　）その他＿＿＿＿

問2　あなたは，旅行するとしたら，次のうちどこへ一番行きたいと思いますか。（1つだけ選んで下さい）
1　深い森　2　古い寺院　3　広い砂浜　4　高原の牧場
5　見晴しのよい山　6　けわしい岩山　7　静かな湖　8　その他＿＿＿＿

問3　あなたは森の中を散歩するのが好きですか，きらいですか。
1　好　き　2　あまり好きではない　3　きらい

問4　あなたは木材生産のために造林される事をどう思いますか。
1　増産しない方がよい　2　増産した方がよい　3　わからない

問5　あなたは，「農場や牧場や森がいりまじっている人手の加わった自然」と「まったく人手の加わらない森林や荒野のままの自然」とどちらが好ましいと思いますか。
1　人手の加わった自然　2　ありのままの自然

問6　「森林，森や林を美しく維持するためには，人間の手を加えなければならない」という意見と「森林を美しく維持するためには，人間の手を加えるべきではない」という意見がありますが，どちらが正しいと思いますか。
1　人間の手を加えなければならない　2　人間の手を加えるべきではない

問7　あなたは森林を訪れた時，様々な手入れに気付きますか。（たとえば　枝打ち　下刈，伐採跡他 etc）
1　は　い　2　いいえ

問8　もし気付くとすれば，その手入れのし方は気になりますか。
1　は　い　2　いいえ

問9　もし気になるとしたら，どの様な事ですか。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問10　あなたは過去1年間の間に森林に行った事がありますか。
1　はい　（　）回くらい　2　いいえ

問11　どのような目的で森林に行った事がありますか。（いくつでも書いて下さい。）
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問12　行った事のある森林の場所，あるいは名前を書いて下さい。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問13　あなたは，大きな古い木を見た時に，何か神々しい気持ちをいだきますか。
1　いだく　2　いだかない

問14　あなたは，深い森に入ったとき，何か神秘的な気持ちをいだきますか。
1　いだく　2　いだかない

問15　あなたは，日の出や日没，また静かな山の中で，あらたまった気持ちになったりすることがありますか。
1　あ　る　2　な　い

問16　あなたは，山川草木，山や川や草や木など，このようなものに霊がやどっているような気持ちになったことがありますか。
1　あ　る　2　な　い

問17　あなたは，森林に入るとメルヘンを感じますか。
1　は　い　2　いいえ

問18　次のスポーツの中で，一番好ましいのはどれですか。（一つだけ選んで下さい。）
1　水　泳　2　マラソン（ジョギング）　3　ハイキング
4　キャンプ　5　スキー　6　ハンティング（狩猟）
7　ゴルフ　8　ヨットやボート　9　登　山
10　魚つり

問19　あなたは，鳥や獣をとる狩猟・ハンティングを，よいスポーツだと思いますか。
1　よいと思う　2　よいと思わない　3　わからない

問20　これからも森林を何らかのかたちで利用していこうと思いますか。
　1　は　い　　2　いいえ

問21　これから森林を木材生産専用として利用する方がいいでしょうか。休養専用として利用する方がよいでしょうか。
　1　木材生産専用として利用する。　　2　休養専用として利用する。
　3　木材生産・休養のそれぞれの専用林を設ける。　4　1つの森林で両者を共存利用する。

問22　別紙に二つずつ並んだ写真が五組示してあります。二つ並んだ写真をごらんになって，AとBとどちらが好きですか。写真の良し悪しではなく，景色としてどちらが好きですか。
　1　1　Aが好き　　2　Bが好き
　2　1　Aが好き　　2　Bが好き
　3　1　Aが好き　　2　Bが好き
　4　1　Aが好き　　2　Bが好き
　5　1　Aが好き　　2　Bが好き

問23　あなたは，どのような森林が好きですか。次の五組の問それぞれについて答えて下さい。
　1　1　針葉樹の純林　　2　広葉樹の純林　　3　混交林
　2　1　下ばえのある森林　　2　下ばえのない森林
　3　1　樹高が一様な森林　　2　様々な樹高の木が入り混ってる森林
　4　1　直立木がそろっている森林　　2　奇妙な形の木などがある森林
　5　1　大木がそろっている森林　　2　幼樹がそろっている森林　　3　混っている森林

問24　あなたにとって最も親しみのある木の名前を五つあげて下さい。
　1 ＿＿＿＿＿＿　2 ＿＿＿＿＿＿　3 ＿＿＿＿＿＿
　4 ＿＿＿＿＿＿　5 ＿＿＿＿＿＿

問25　そのうちで一番好きな木は何ですか。
　＿＿＿＿＿＿

問26　あなたの住んでいる所は，どのような環境だと言えますか。
　1　商店街　　2　住宅地　　3　田畑が多い
　4　山林が多い　　5　その他

問27　あなたの家から一番近い森林まではおよそどれくらいの距離ですか。
　およそ＿＿＿＿＿＿km

問28　あなたはその森林を日常的に利用していますか。
　1　は　い　　2　いいえ

問29　どのような目的で利用していますか。（いくつでも書いて下さい）
　＿＿＿＿＿＿

問30　近くに森林のない人は森林に行くとしたらどこへ，どういう手段で行きますか。
　＿＿＿＿＿＿

問31　乗物にのって森林に行った事がありますか。ある人は具体的な森林の場所，目的，手段（乗物）を書いて下さい。
　1　は　い　　2　いいえ
　＿＿＿＿＿＿

問32　これから人間，私達は，森林をどのように利用していけばよいと思いますか。自由に書いて下さい。
　＿＿＿＿＿＿
　＿＿＿＿＿＿

問33　あなたの性別は，　1　男　　2　女

問34　あなたの年令は＿＿＿＿＿＿才

問35　あなたの職業は，＿＿＿＿＿＿（具体的にお願いします）

問36　あなたの現住所（地区名は）＿＿＿＿＿＿

問37　最近今の住所になられた方はその前の住所を書いて下さい。
　＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました。

アンケート調査によって明確にしたいことは大きく分けて

イ）　住民の森林に対する評価

ロ）　住民の森林利用状況

ハ）　住民の森林利用要求

である。このような視点からアンケート調査項目を設定することにしたが，基本項目としては“森林環境に対する住民意識の国際比較調査”（四手井，石田，北村，菅原，等）において用いられた項目を利用し，それ以外に必要と思われる項目を付加して37問とした。その項目を示しておくと次のようである。（アンケート参照）

§5　調査対象地の選定

本研究は，地方都市における緑地問題解明を目的とするものである。したがって調査対象地選定の第一条件は，地方都市とする。

しかし，地方都市と言ってもその規模によって様々であり，奥田義雄[5]によると次の様に分類されている。

イ）　地方中枢都市：地方圏の各ブロックの中心都市。人口百万程度の都市

ロ）　地方中核都市：県域相当地域の中心都市。人口20～100程度の都市

ハ）　地方中心都市：県域を分割した場合の各地域の中心都市。人口６万～７万程度の都市

ニ）　地方中小都市：イ）～ハ）以外の地方都市

この地方中枢都市，地方中核都市，地方中心都市においては，都市化が著しく進み，緑地問題に関しては，緑地面積が量的に激減するといったように大都市圏での緑地問題と類似した問題が生じてきている。地方中小都市においてもやはり高度経済成長期以降，都市化が激化してきた。とは言え他と較べると市街地周辺部には広面積を占める森林が存在し，環境として現在非常に良好な状態にあると言える。しかしこの地方中小都市においてその市街地の住民のみならず，市街地周辺部の住民にしても生活の中心は市街地に向いており生活そのものは都市化していると考えられる。

本研究においては，森林面積がまだ十分に確保されていて現在のところ環境が良好であると考えられているが，住民の生活は都市化している状態が顕著である地方中小都市を，調査対象地とし，具体的な対象地として，長野県伊那市を選択した。

伊那市を選択した理由は

イ）　地方中小都市であると判断できること

ロ）　市街地周辺部にかなり広大な森林面積を有しているとともに，市街地内部にも斜面樹林が残存していること

ハ）　伊那市は伊那谷の政治経済の中心として位置付いていて，多様な産業が存する市であると判断できること

ニ）　現在，斜面樹林を中心として緑地保全を考えていこうとする動きが活発であること

ホ）　調査者が当地域に居住しており，現状を自分の目でとらえやすいこと

等である。

Ⅱ　意識調査の実施

§1　調査対象地域の概況

1　伊那市の概況

調査の対象地とした伊那市は，長野県中南部の中心に位置する面積208.75km²，人口55422人（1978年10月1日）の地方中小都市である。伊那市は1954年4月に伊那町を中心として富県村，美すず村，手良村　東春近村，西箕輪村が合併して市制が敷かれ，さらに1960年4月

Tab. 1.　産業大分類別事業所数の推移（53.6.15　民営）

産業大分類	昭和47年	昭和50年	昭和53年		増加率	
				構成比	47～50年	50～53年
全産業	2,825	2,929	3,163	100.00(%)	3.68(%)	7.99(%)
農林水産業	9	15	18	0.57	66.67	20.00
鉱業	6	8	7	0.22	33.33	△12.50
建設業	235	265	297	9.39	12.77	12.08
製造業	444	454	494	15.62	2.25	8.81
卸売小売業	1,388	1,404	1,517	47.96	1.15	8.05
金融保険業	39	42	54	1.71	7.69	28.57
不動産業	47	62	75	2.37	31.91	20.97
運輸通信業	24	29	27	0.85	20.83	△ 6.90
電気ガス水道業	4	3	5	0.16	△25.00	66.67
サービス業	629	647	669	21.15	2.86	3.40

注）　市政要覧「いな」(1979)

Tab. 2.　産業大分類別従業者数の推移（53.6.15　民営）

産業大分類	昭和47年	昭和50年	昭和53年		増加率	
	(人)	(人)	(人)	構成比	47～50年	50～53年
全産業	20,215	20,356	22,436	100.00(%)	0.70(%)	10.22(%)
農林水産業	40	165	170	0.76	312.50	3.03
鉱業	85	77	42	0.19	△ 9.41	△45.45
建設業	2,101	2,314	2,278	10.15	10.14	△ 1.56
製造業	8,307	8,184	8,954	39.91	△ 1.48	9.41
卸売小売業	5,519	5,458	6,047	26.95	△ 1.11	10.79
金融保険業	562	509	741	3.30	△ 9.43	45.58
不動産業	77	89	105	0.47	15.58	17.98
運輸通信業	772	795	776	3.46	2.98	△ 2.39
電気ガス水道業	109	123	137	0.61	12.84	11.38
サービス業	2,643	2,642	3,186	14.20	△ 0.04	20.59

注）　市政要覧「いな」(1979)

に隣接する西春近村を合併して今日の状態に至っている[3]。

伊那市の産業の特徴は，多様な産業が何らかのバランスを保ちながら存続しているところにある。Tab. 1. の産業大分類別事業所数の推移，および Tab. 2. の産業大分類別従業者数の推移を見てもわかるように，飛び抜けて盛んな中心となるような産業はなく，多種類の産業が存続している。1979年に青年会議所によっておこなわれた意識調査[6] の中で，"伊那市は今後どのような事に重点を置いて発展すればよいか" という設問がある。その結果においても住民の意識は工業・商業，政治の中心・農業・観光と散らばっており，伊那市の産業基盤の多様さ，特徴のなさを示している。しかしこのことは，住民の個性や立場を非常に多面的にし，森林に対する多様な立場を生む大きな要因となっていると考えられる。

2　伊那市の森林概況

伊那市の森林面積は市全体面積の60.6%を占めている。その地形は天竜川上部の河岸段丘に広がり森林地帯は標高600m～2726mにわたっている。

山林の所有形態別面積，森林資源の構成については Tab. 3.，Fig 1・2で示したようであるが実際の林業経営の対象地は標高 1,800m位までであり，林業経営の対象とならない高山帯対も1,170ha に及び，森林面積の10%に近い数値を示している。民有林の人工林率を経営対象林分から見れば，63%と非常に高いが，アカマツ，カラマツ中心の林業経営となっている。また森林面積の約46%を占めている個人有林は零細であり，農業や会社勤めの兼業的な位置付けにされているにすぎず，木材生産で主要な位置を占めているのは，国有林，公有林それに部落有林である[2]。そしてまた，近年の林業労働問題や外材輸入の問題によって，林業低迷，経営意欲の減退が著しく林業離れが進んできている。しかしその反面，防災機能や水資源の確保的機能，保健休養的機能など森林に対する多面的な要請が強くなってきており，今後の林業振興に対して多くの問題を投げかけている。

また伊那市において，市街地から遠くても 8～10km 内外の位置に森林が存しており，市街地居住者でも森林を利用することが多く，長田温泉保養センター，深沢林道，伊那梅園，

Tab. 3.　所有形態別山林面積

区分		面積 (ha)	比率 (%)
国有林		2,477	19.6
公有林	県有林	1	0.0
	市有林	340	2.7
	財産区有林	1,410	11.1
	小計	1,751	13.8
私有林	部落有林	2,100	16.6
	国体有林	533	4.2
	個人有林	5,795	45,8
	小計	8,428	66.6
合計		12,656	100.0

注）　伊那市基本計画（1979）

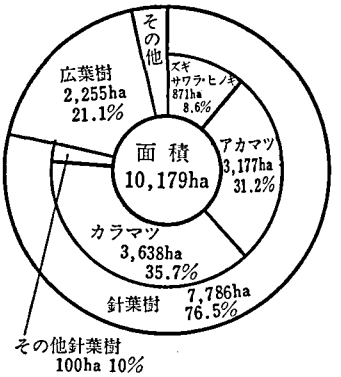

Fig. 1　樹種別森林構成

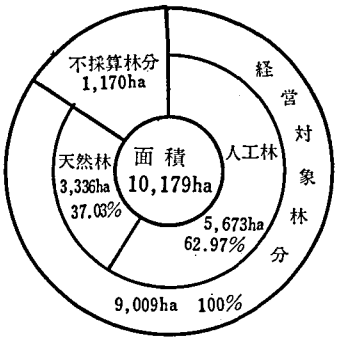

Fig. 2　人・天別森林構成

桑沢ダム，大泉ダム，大泉リンゴ園，伊那国際ゴルフ場，大芝スポーツ公園，大芝森林，羽広仲仙寺，羽広植物園，信州大学農学部，大六天，経ケ岳林道，権兵衛峠遊歩道，南沢鉱泉，横山スキー場，鳩吹山展望台，伊那西スケートセンター，鳩ケ池，物見ヤ城，高烏谷鉱泉，高烏谷林道などは，市民の森林利用を助けるものとなっている。

§2　調査対象者の概況

本研究の調査対象者は，伊那市に居住する20才以上の成人とすることにした。

人間の意識に影響を与える要因は様々である。それらは単独に意識形成にかかわっているのではなく複合的にかかわっているわけであるが，特に意識形成に対して大きな影響を与えるものとして一般に空間（環境）・時間（時代の社会的背景）・生活基盤である[9]と言われている。この点を考察に入れると調査対象者は次のような構成に区分できる。

イ）　居住地区別構成

ロ）　年齢別構成

ハ）　性別構成

ニ）　職業別構成

それらの間での意識が次のような観点で差異を生じているものと考えられたので

イ）　住民の生活環境の差異によって伊那市を次の三つの地区に

・土地利用上，都市化が最も進んでいる，いわゆる市街地と呼ばれる地域

・土地利用上，現在都市化や激化進行中の地域

・土地利用上，都市化がほとんど見られない，森林に近い地域

ロ）　住民が過してきた時代背景の差違により次の３段階の年齢区分に，

・20才～40才（1960年生～1940年生）

・41才～60才（1939年生～1920年生）

・61才以上　（1919年生～）

ハ）　性別によって

・男性

・女性

職業別については，伊那市のような地方中小都市の場合，兼業形態をとっていることが多いため，明確に区分することが難かしかったので，とりあげないことにした。

§3　調査対象者の選出

1）　アンケート調査対象母集団

昭和55年4月現在の伊那市の選挙人名簿登録者39045人をアンケート調査対象の母集団とした。

2）　アンケート調査の対象標本

前記母集団から昭和55年5月8日に無作為等間隔抽出法によって1012人を抽出したうえで，年齢構成，性別構成の点での調整をおこない，最終的には877人を調査対象標本として抽出した。

3）　対象母集団と対象標本との比較

イ）　性別構成

母集団		標本	
男	18,444 人（47.2%）	男	441 人（50.3%）
女	20,601 人（52.8%）	女	436 人（49.7%）
計	39,045 人（100.0%）	計	877 人（100.0%）

ロ）　年令別構成

母集団		標本	
20—40才	14,966 人（37.9%）	20—40才	289 人（33.0%）
41—60才	14,941 人（38.3%）	41—60才	346 人（39.4%）
61才以上	9,138 人（23.8%）	61才以上	242 人（27.6%）
計	39,045 人（100.0%）	計	877 人（100.0%）

ハ）　地区別構成

選挙人名簿が各投票所ごとに分けられてあったので各台帳から約10名づつ等間隔抽出を行なったので，標本の地区構成比はその地区人口に比例しているものと考えられる。

以上の点から考えて，対象標本は対象母集団を代表していると考えて良いであろう。

§4　調査の実施

以上の調査対象の標本者に対して，

イ）　アンケート用紙2枚（含写真）

ロ）　研究の目的および調査への協力のお願いを書いた紙

ハ）　返信用封筒（切手貼付ずみ）

を郵送によって配布した。

Ⅲ　アンケート調査結果のまとめ

§1　アンケート用紙の回収状況

アンケート用紙の回収状況は，配布した877通中配達されなかった12通を除いた865通に対

し，返送されてきたものは342通であり，回収率は40%であった。回収されたものの構成別比率は次のとおりであるが，母集団の構成との間に若干の差異を示した。

イ）性別構成

男	185 人 (54.09%)
女	157 人 (45.91%)
計	342 人 (100.00%)

ロ）年令別構成

20—40才	105 人 (30.70%)
41—60才	162 人 (47.37%)
61才以上	75 人 (21.93%)
計	342 人 (100.00%)

ハ）地区別構成

都市化の最も進行した市街部地域の住民	172 人 (50.30%)
都市化の進行中の地域住民	75 人 (21.92%)
都市化のあまり見られない，森林に近い地域の住民	95 人 (27.78%)
計	342 人 (100.00%)

以後，都市化の最も進行した地域を第一地域，都市化の進行中である地域を第二地域，都市化がほとんど見られないような森林に近い地域を第三地域と略して示していくことにする。

§2　森林利用の現状

"あなたは過去1年の間に，森林へ行ったことがありますか" また，"行ったことのある人は年何回位ですか"（設問10）という設問に対してTab. 4. のような回答結果が得られた。

Tab. 4.　設問10　回　答　結　果　　(単位%)

	はい	いいえ	無回答	年1—3回	4—6回	7—12回	13回以上	無回答
第一地域の住民	75.6	22.1	2.3	84.4	3.3	1.6	5.3	5.4
第二地域の住民	83.2	14.7	2.1	82.1	10.2	2.3	1.2	4.2
第三地域の住民	80.0	14.7	5.3	60.8	23.7	1.0	8.2	6.3
平　　均	78.7	18.4	2.9	75.8	12.7	1.3	4.9	5.3

注）数えきれない程という回答は13回以上に含めた。

この結果からは，市街地の住民ほど，森林を利用する機会や利用回数が少なく，森林に近い地域の住民ほど，その機会や利用回数が多いことがわかる。

そしてこの場合の森林利用目的についての回答結果によると，（設問11）市街地の住民の方は，登山・休養・レクリエーション・キャンプ・植物採集・鳥の声を聞く為・散歩・スケッチ・山菜採り・それに林業関係の施業（枝打ち・下刈り・植林・伐採・調査）などの多様であり，森林に近い地域の住民，あるいは田園部の住民の利用目的には，職業としての仕事や村共同の仕事である枝打ち・下刈り・植林・見廻りなどが多く，その他には山菜採り・野菜の手・肥料・燃料などの利用が見られたが，"休養" "レジャー" という目的は若い住民に少し見られただけで，ほとんど記述されておらず，利用目的が市街地住民に比べて限られていた。

これらのことから，市街地の住民は森林を利用する機会は少ないが，利用者個々人によってその利用目的が多岐に広がっており，それに対して森林に近い地域の住民は，森林を利用

する機会は多いが，その利用目的は市街地の住民の場合に比べて共通しており，単一的あるいは限定的であると言えるであろう。

"乗物に乗って森林に行ったことがありますか"（設問31)という設問に対しては，Tab. 5のような回答結果が得られた。

Tab. 5. 設問31 回答結果　（単位%）

	はい	いいえ	無回答	計
第一地域の住民	70.2	27.5	2.2	100.0
第二地域の住民	50.5	46.1	3.4	100.0
第三地域の住民	49.6	47.2	3.2	100.0
平　　均	58.6	40.3	3.1	100.0

一般に乗物で森林まで出かける目的は大きく分けて，休養と林業施業（仕事）があげられ，その乗物としては，乗用車が80%以上を占めていた。そして，乗物を利用して行く場合，森林に近い地域の住民は，北アルプスや南アルプス，八ケ岳，赤沢休養林，戸隠など遠い森林に行くという結果が得られたが，市街地の住民に限ってみると，遠くの森林のみならず，伊那市内の森林に行くにも乗用車を用いる場合が多いという結果が得られた。

"あなたは日常的に森林を利用していますか"（設問28）という設問についてはTab. 6のような回答結果が得られた。

Tab. 6. 設問28 回答結果　（単位%）

	はい	いいえ	無回答	計
第一地域の住民	18.6	68.6	12.8	100.0
第二地域の住民	27.4	70.5	2.1	100.0
第三地域の住民	38.7	56.0	5.3	100.0
平　　均	25.4	66.4	8.2	100.0

"乗物に乗って，あるいは乗物を使用せずに仕事・休養・山菜採り・登山・などの目的で森林を利用してきた"と回答してきた住民のうち66%の住民が"日常的に利用していない"と答え，特に乗物に乗って森林に出かけると回答した人が70%も占める市街部住民においては，"日常的に利用している"と回答しているのはわずか20%にすぎないのである。

設問29の回答結果を見ると"日常的な利用目的"としてとりあげられているのは，下刈り・枝打ち・植林・伐採などの作業，散歩，などが記述されているにとどまり，それに対して"森林を利用する目的"についての回答結果は，休養・レジャー・山菜採り・林業作業……などと多岐にわたっていて二つの設問回答の結果の間には，大きな差異が見られた。すなわち日常的利用というのは主として仕事による利用のように収入面で直接的に生活と結びついているものや，燃料・肥料のように実質的な面で結び付いているものと理解されているため，そ

れだけに森林に近い地域では“日常的利用をしている”という回答比率が市街地より高く，一方精神面での利用が多い市街地では“日常的利用をしている”という自覚が少ない。

以上のことから住民が自覚している森林の利用現状についてまとめると次のようである。

イ）森林利用の機会はやはり，森林に近い地域の住民の方が多いと思われるが，実際住民が回答してくれた利用回数については，市街地の住民の場合とさほどの差異がない。

ロ）森林を利用する目的については市街地の住民の方が多面的であり，森林に近い地域の住民の目的は共通的なものに集中している。

ハ）乗物に乗って森林に出かける割合は，市街地住民の方が高く，その目的は休養・レジャーに集中する。ただし，市街地の住民は遠くの森林のみならず伊那市内の森林に行く場合にも乗用車を利用する。

ニ）現在住民自身がおこなっている利用について，日常的な利用をしているという自覚は低く，休養利用など比較的精神面での利用は日常的な利用目的として述べられていない。

§3　森林に対する住民の利用要求および森林利用に関する住民の意見

1　林業施業に関する住民の意見

“あなたは森林を訪れたとき様々な手入れに気付きますか。もし気付くとすればその手入れのし方は気になりますか。もし気になるとしたらどの様なことですか”（設問7，8，9）という設問について，Tab. 7と8のような回答結果が得られた。

Tab. 7.　設問7　回答結果　（単位%）

	気付く	気付かない	無回答	計
第一地域の住民	91.9	5.8	2.3	100.0
第二地域の住民	91.6	8.4	0.0	100.0
第三地域の住民	96.0	0.0	4.0	100.0
平　　均	92.7	5.3	2.0	100.0

Tab. 8.　設問8　回答結果　（単位%）

	気になる	気にならない	無回答	計
第一地域の住民	56.2	43.6	5.2	100.0
第二地域の住民	54.7	43.2	2.1	100.0
第三地域の住民	70.7	25.3	4.0	100.0
平　　均	56.1	39.5	4.4	100.0

どの地域の住民においても森林に対してなされている手入れに気付く住民の割合は，90%以上と高い。特に森林に近い地域の住民は無回答者を除いた全員が“手入れに気付く”と答えている。しかしその手入れが気になるか否かの問題に関しては，“気になる”と答えた割合は平均として56%であって，手入れに気付いていたとしても決して気付く＝気になるとい

うものではないのである。市街地の住民や現在都市化が進行しつつある地域の住民に比べて，森林に近い地域の住民はかなり多くの割合で“手入れが気になる”と答えている。どのような点が気になるかと言うと枝打ちの状態，下刈りのやり方，つる切りの状態など自分の持山に限らずどの山に行っても自分の山との比較において気になると答えている住民が多い。

森林に近い地域の住民にとっては，森林に人間の手が加えられていることを当然であるとして，またその手入れの仕方が他の目的で森林に行ったときでも気になるというのはうなづける結果である。一方市街地の住民が，林業的施業がなされていることに気付いたとしても約半数の人が気にならないと答えていることは，やはり仕事としてあるいは直接的な生活の糧として森林にかかわっていないから，森林地域の人達の様に自分達の関与している森林の手入れと比較したりして，気にすることはほとんどないと言える。これは，市街地の住民であっても林業関係に携わっている人がつねに山の手入れが気になると答えていたことからも言えるであろう。ただ，森林の手入れに気付く住民の割合が90%以上と予想外に高かったが，人々が森林に対してなされている施業をよく知り気付いているのではなくて，ただ観念的にのみ理解していることが後に述べる他の設問結果から判断されるのである。

ここで林業施業に関する住民の理解をまとめておくと，次のようである。

イ）　森林に対してなされている林業的施業に気付くと答えた住民は，90%以上を占め，とくに森林に近い地域の住民は，アンケート回答者全員が気付くと答えている。ただし，本当に理解して回答したか否かは疑問である。

ロ）　手入れに気付くと答えた住民がすべて手入れが気になると答えているわけではない。林業に従事している住民，あるいは森林地域の住民は，自分が仕事のうえで，あるいは村共同の仕事のうえでかかわっている森林や，自分所有の森林の手入れはもちろん，他の人の森林であっても自分の森林と比較することによって森林の手入れの仕方を非常に気にしている。

Tab. 9.　設問4　回　答　結　果　（単位%）

	増産した方がよい	増産しない方がよい	わからない	無回答	計
第一地域の住民	82.0	7.6	9.3	1.1	100.0
第二地域の住民	86.3	6.3	5.3	2.1	100.0
第三地域の住民	86.7	4.0	8.0	1.3	100.0
平　　均	85.0	6.0	7.5	1.5	100.0

Tab. 10.　設問21　回　答　結　果　（単位%）

	木材生産専用として森林を利用する	休養専用に森林を利用する	各々の専用林を設ける	1つの森林で両者を共存する	無回答	計
第一地域の住民	7.0	1.7	48.3	30.3	12.7	100.0
第二地域の住民	16.8	0.0	53.7	25.3	4.2	100.0
第三地域の住民	11.3	2.7	59.3	20.0	6.7	100.0
平　　均	11.7	1.5	53.8	25.2	7.9	100.0

2　今後の森林利用のあり方に関する住民の要求および期待

"あなたは今後木材増産のために造林されることをどう思いますか"（設問4）"これから森林を木材生産専用として利用すべきか，休養専用として利用すべきか，共存させるべきか"（設問21）という設問に対して Tab. 9と10のような回答結果が得られた。

木材生産利用に対して80%以上もの人達が"今後も増産利用していく方がよい"と回答している。しかしわずかの差ではあるが，市街地の住民ほど"増産しない方がよいと"いう意見の割合は高く，森林に近い地域の住民ほど，"増産した方がよい"という意見の割合が高いことは興味深いことである。

今後の利用についての市街地住民と森林地域住民とでの要求の違いは，専用利用と共存利用についての意見において顕著に認められる。すなわち，市街部の人達は木材生産と休養利用との両者を"今後同一の森林で共存させていくべきだ"という意見が強かったのに対し，森林に近い地域の人達は，"木材生産と休養と各々の専用林を設けるべきだ"という意見が多く，都市化の進行中の地域の住民は，ちょうど両地域の住民意見の中間的な位置にあった。木材生産利用において徹底的な経済追求をするにはそれなりの森林構成があり，それを目指すための施業の仕方があるであろうし，一方休養利用においてより高い休養効果を目指すにはそれなりの森林構成がある。森林地域の人達は，自分達が日頃森林とかかわっている中で両者の共存を困難であると考え，また意識的に他の人が自分の森林に入ってくることに関してわだかまりを持っているのであろう。市街部の人達の意見のように両者の共存を目指すことは理論的には良いことかもしれない。しかし市街部の人達は森林に行く側であり，木材生産施業についての本当の理解がないまま，安易に両者の共存利用が可能であると考えてしまうのであろう。

"今後森林を何らかの形で利用していこうと思いますか"（設問20）という設問に対しては，どの地域の人達も90%以上の割合で"利用していきたい"と答えている。また，"森林を美しく維持するためには人間の手を加えねばならないと思うか，それとも手を加えるべきではないと思うか"（設問6）という設問に対しても，すべての地域において大差なく"手を加えるべきだ"と答えている。したがってほとんどの住民が森林に対し積極的に関与していこうという要求については一致していると考えて良い。その反面，"今後の森林利用に何を期待するか，何を目指そうとするか"の点においては，市街地住民と森林地域住民との差異が表われていると判断できる。

ここで，今後の森林利用のあり方に関する要求や意見についてまとめると次のようである。

イ）木材生産利用に対して住民は，今後の増産を望んでいるが，森林地域の住民に比べて市街地住民，都市化進行地域の住民の方が，"増産しない方がよい"という回答割合が高い。

ロ）市街地住民は同一の森林での木材生産と休養利用の共存を目指そうとし，森林地域の住民は，各々利用目的に適した森林毎の専用利用を目指そうとしている。

ハ）今後森林を何らかのかたちで利用していきたいという意志表示は多く，森林に対する期待が数字的な結果からはうかがえる。

§4　森林に対する地域住民の認識

1　森林の構成に関する意見

"あなたはどのような森林が好きか"（設問22, 23）という設問に関してはどの地域の住民も同じような傾向を示したので平均値の結果をもって代表させておこう。

設問23　回　答　結　果

1）針葉樹林	48.3%	広葉樹林	13.5%	混交林16.7%	無回答21.5%　計100.0%
2）下ばえのある森林	22.8%	下ばえのない森林	51.2%		無回答26.0%　計100.0%
3）樹高が一様な林	52.3%	そうでない林	26.6%		無回答21.1%　計100.0%
4）直立木がそろってる林	61.7%	奇妙な形の木のある林	19.3%		無回答19.0%　計100.0%
5）大木がそろってる林	50.9%	樹種がそろってる林	8.8%	混成林20.2%	無回答20.1%　計100.0%

この選択設問については文章による設問と写真による選択設問を組み合わせてみた。その結果文章による設問の結果とほとんど同傾向を示したが，針葉樹林と広葉樹林については，写真の設問の場合に，広葉樹林を好む人の方が多かった。これは写真では美しく黄葉したシラカバ林があげられていたため，視覚的な問題として回答する人が多かったものと考えられる。写真の設問では広葉樹の方を好むと回答したにもかかわらず，文章による設問には針葉樹林を好むとの回答が多いことは，日頃木材生産のために植栽された針葉樹林あるいは混交林とのかかわりの方が多いことを示しているのであろう。

また"あなたにとって親しみのある木の名前は何か"（設問24）"最も好きな木は何か"（設問25）の設問によって，生活環境の違いによる森林あるいは樹木との接し方，認識の違いをみることにした。それに際しては，各樹種毎にあげるのではなく，住民があげた諸樹種を，

イ）伊那近郊の森林構成樹種として住民の生活内に存在する樹種群。（ヒノキ・スギ・マツ・カラマツ・五葉松・赤松・コウヤマキ・モミ・ツガ・イチイ・シラカバ・トチ・ケヤキ・モミジ・カツラ・サクラ・クリ・ツツジ・など）

ロ）庭木・街路樹など園芸用樹種群。（黒松・五葉松・コウヤマキ・イチイ・モミジ・ツツジ・ツバキ・ヒイラギ・シャクナゲ・サクラ・ポプラ・プラタナス・など）

ハ）木材として生活内に存在する樹種群。（ラワン・ヒノキ・スギ・マツ・サワラ・カラマツなど）

に分けてこの設問を整理してみた。その結果は Tab. 11のようにまとめられた。

また親しみがあると答えた樹木を針葉樹と広葉樹に分けると Tab. 12 のような結果が得られた。

森林に近い地域の住民が木材としての主要木を親しみのある樹木としてあげたり，市街地

Tab. 11.　設問24　回　答　結　果　（単位%）

	伊那市近郊の森林構成樹種群	街路樹・庭木園芸樹種群	木材樹種群
第一地域の住民	83.7	12.6	53.5
第二地域の住民	88.4	12.0	66.3
第三地域の住民	93.3	9.1	72.0
平　　均	88.5	11.2	63.9

注）樹種群に分けるとき重複があるため%の合計は100にはならない。

Tab. 12.　設問24　回　答　結　果　　（単位%）

	針葉樹群	広葉樹群	無回答	計
第一地域の住民	60.2	38.4	1.4	100.0
第二地域の住民	59.8	40.0	0.2	100.0
第三地域の住民	75.3	23.6	1.1	100.0
平　　均	65.1	34.0	0.9	100.0

住民や都市化の進行しつつある地域の住民が，庭木や街路樹によく使われている樹種をあげるのは，非常に理解しやすいことである。しかし，森林に近い地域の住民は針葉樹のみではなく，広葉樹も多く知っていて親しみのある樹種が多様であろうと予想していたにもかかわらず住民の親しみのある樹木は針葉樹に偏より，市街地の住民の方が幅広い樹種に親しみを抱いている傾向が見られた。

そこで，森林の構成に関する意見についてまとめると次のようである。

イ）住民は，"針葉樹林"・"樹高が一様な森林"・"下ばえのない森林"・"直立木がそろっている森林"・"大木がそろっている森林"を好む傾向がある。

ロ）市街地住民や都市化の進行中の地域住民は，庭木・街路樹・園芸用樹木などにより多くの親しみを持っており，森林に近い地域の住民は，木材生産のための主要木，伊那市近郊の森林構成木により多くの親しみを持っている。

ハ）森林に近い地域の住民が親しみを持つ樹種にはばらつきが少なく，市街地住民が親しみを持つ樹種にはばらつきが見られ，多様であった。

2　森林の役割りに関する認識

"あなたは，森林は何のためにあると思いますか。最も重要だと思うものから順に番号をうって下さい"（設問1）という設問において，まずそれぞれの役割りについての総合的な住民の順位付け（重み付け）を見るために加点法によって整理をした。その結果はTab. 13のようである。

どの地域においても"治山・治水""空気・水の浄化"の役割りを高く評価しており，"木材生産"については，森林地域の住民でさえも高い評価を下していない。

森林地域の住民において，"木材生産"が最も重要だと答えた人が26.7%，2番目に重要

Tab. 13.　設問1　回　答　結　果　　（単位　点，（　）%）

	治山・治水	空気・水の浄化	休養	木材生産	鳥獣保護	計
第一地域の住民	680 (30.8)	559 (25.3)	197 (8.9)	508 (23.0)	263 (11.9)	2207 (100.0)
第二地域の住民	310 (27.3)	300 (26.4)	122 (10.7)	294 (25.9)	170 (15.0)	1196 (100.0)
第三地域の住民	273 (25.6)	334 (31.3)	85 (8.0)	240 (22.5)	136 (12.7)	1068 (100.0)
平　　均	421 (27.9)	398 (27.7)	135 (9.2)	347 (23.8)	190 (13.2)	1491 (100.0)

だと答えた人が25.3%になっていて，他の地域において各々14.0%，14.7%であるのと比べると高くなっているものの，加点法で見る限り“木材生産”は“治山・治水”“空気・水の浄化”に続いて第三番目の地位しか得ていない。またこの“木材生産”についての順位付けにはばらつきが見られ，特に森林地域の住民において分散幅が大きいことは興味あることである。

一方“休養”については，どの地域の住民も低い評価しかしていない。他の設問に対して住民の多くは森林を休養目的で利用していると言っていながら，“森林の役割り”という逆からの設問に対しては，非常に一般論的な回答しかしていないことがわかる。また，森林地域の住民が市街地住民と同じ割合でこの“休養”に対して順位付けしていることも注目すべきことであろう。

“鳥獣保護”という森林の役割りについては，“休養”を上まわる評価がどの地域の住民によってもなされている。本来，木材生産の害となる動物に悩まされているはずの森林地域の住民が，市街地の住民よりこの“鳥獣保護”という森林の役割りに対する評価が高いことも注目すべきことであろう。

ここで，森林の役割りについてまとめておくと次のようである。

イ）　加点法によると，住民の森林の役割りの順位付けとしては，“治山・治水”・“空気・水の浄化”・“木材生産”・“休養”という順になった。

ロ）　木材生産に対する順位付けには，ばらつきが見られた。

ハ）　森林地域の住民の森林に対する役割り順位付けはばらつきが見られた。

3　今後の森林のとらえ方に関する住民の意見

このアンケートの最後に“これから私達は森林をどのように利用していけばよいと思うか”（設問32）という自由記述の設問を設けた。この設問の意図は，自分という主体が，今後森林に対してどう働きかけていくべきか，あるいは働きかけようとしているかを答えてもらおうとしたものである。しかしその回答の中に森林のあり方そのものについての意見が見られ，また“自分は今後森林をこうとらえていくべきだと考える”という住民の意志・意見が表わされているため，ここで“森林のとらえ方”逆に言い直せば“森林のあり方”としてまとめておくことにしよう。

まず第一に住民が述べた今後の森林のあり方について，各住民が目指そうとする利用については差があるとしても，自分という主体を考えて森林を生活に結び付けて存在させる必要性を述べている意見がみられた。

ある住民は“今まで山村で育ち，生活して，森林あるいは緑について何ら意識しなかったが，今回のアンケート調査に回答しながら，その認識の低さにおどろき，身近にある森林をあらためて見直す必要性を感じた。”と述べている。その住民にしても，“生活に結び付いた森林”とはどのようなものか，自分はどのように利用していくべきかについて具体的な意見は述べられていない。しかし，現在多くの住民に欠けている重要な視点であると考えられる。

第二のとらえ方として，森林をひとつの文化遺産として見ようとする意見があげられる。ある住民は，“森林は現在破壊されつつあるが，子供達に美しいままの森林を残す必要がある。”と述べまた，“森林は美しい日本の象徴となるもの……”と述べている。この場合，利用・活用しながら森林を残そうとしているのか，ただ何も手を加えず残そうとしているのか

不明であるが，森林を今まで人間が形成してきたひとつの文化としてとらえ，残す必要性があるものとして評価している。

第三に，"森林は無限の可能性を有するものだ" というとらえ方がみられた。こう述べている住民達自身，森林を単一的にしか利用していないから，森林に関しての一般論が述べられているのか，自分の経験から述べられているのか判断つけ難い。しかし，個々人的には単一目的利用であっても，各人が異なる目的を有するなら，その利用対象となる森林は，無限の可能性を有すると考えられ，また森林は，自分一人の利用対象となるものではなく，多くの人の利用対象となり得るものとしてとらえられる。また，"森林は人間に生きる活力を与えてくれる。" "やすらぎを与えてくれる。" という意見もあるが，これら活力・やすらぎ・うるおいといった抽象的，理屈では割り切れない可能性を有するものとして森林をとらえているとも考えられる。

第四に，森林を自分の故郷としてとらえている住民も見られた。これは第一の生活と結びついたものとしてとらえる見方，第二の遺産としてとらえる見方，第三の無限の可能性を有するものとしてとらえる見方などを，"故郷" という言葉で総合したものかもしれない。ある住民は，"私は子供の頃から森林の中をかけまわって育てきました。一時東京に居てまたこの地に戻ってきた時，やはりここが私の故郷だと思いました。現在都市化が進みつつありますが，皆は自分の故郷である森林，森林あればこその故郷だということを感じないのでしょうか。……" と述べている。

故郷という言葉が何を意味して用いられているかは不明であるが，抽象的ではあっても，定義しきれない様々な要素を含む言葉としておき，ここにはひとつの森林のとらえ方に関する意見としてあげておくことにしよう。

Ⅳ　アンケート議査結果についての考察

§1　森林の利用状態について

伊那市住民による森林利用状況についてのアンケート調査結果から

イ）　森林の利用目的が非常に個別的であること

ロ）　住民の意識の中で，現在の森林利用が，日常的な利用として位置付いておらず，住民の生活の中に森林が位置付けられていないこと

ハ）　市街地の住民にとって森林は乗用車を利用して行くものになっていること

ニ）　住民の生活環境が，必ずしも利用状況を決定するものとはなっていないこと

をとりあげて，考察しておこう。

1　森林の利用目的が個別的であること

森林地域の住民の利用目的と，市街地住民の利用目的をそれぞれ箇条書きにすると，市街地住民の方がその利用目的は多岐にわたっていた。しかしこのことは決して市街地住民個人個人が多様な森林利用をしていることを示すわけではない。従来の森林利用についての議論の中では，集団として見た時の目的の多様性を，その集団を構成している個人が多様な利用をしているとすり換えられてきた。しかし，市街地住民個人をとりあげてみても，ひとりで

数多くの目的を記述した人は少ない。個人個人が別々の目的を有して森林に関与することを集団的にまとめると，多様なかかわりがあると言えるわけである。したがって図Aのような意味での多様ではなく，市街地に住む住民自体が多様であり，それぞれに対応した関わりを持っているという意味で，図Bのような多様性であると考えられるのである。

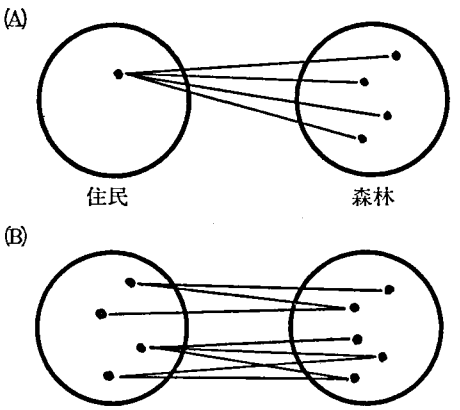

Fig.3　多様性概念図

2　住民の意識の中で，現在の森林利用が日常的な利用として位置付けられていないこと

住民は森林を利用していると回答しているにもかかわらず，“日常的に利用しているか否か”の設問に対しては，“日常的に利用していない”と答えていた住民が圧倒的に多い。“果して休養の為や山菜採り，散歩などに森林へ行くのは日常的利用ではないということなのだろうか”という疑問が生ずる。日常的利用というのは，住民がその目的であげた仕事や森林地域の人にとっての山菜採り，肥料・燃料採りだけなのだろうか。日曜，祭日のみの休養利用であっても，その人の生活サイクルであって，その人の認識のし方において日常的利用として位置付けることも可能であるはずである。しかし現在，伊那市の住民は，市街地，その他の地域にかかわらず，休養的利用，散歩などを日常的利用とは位置付けていない。これは住民は意識的に，休養などを特別な行為，しいては森林に行くことそのものを特別な行為として考えているものと思われる。“森林には何回か行ってはいるが，それは日常生活から離れた特別な行動としてとらえられている現在の利用状態について，もう一度生活と森林の関係から考え直す必要があるであろう。”

3　市街地の住民にとって森林は自動車を利用して行くものになっていること

市街地の住民が乗物によって森林に行く場合，もちろん赤沢休養林，戸隠，北・南アルプスなどと広範囲に広がってはいるが，多くの場合，市街地周辺の森林で完結していると思われる。このことは，伊那市がその市内で，多面的な利用を完結しうるまだ恵まれた状態であると考えられると同時に，同じ伊那市内の森林に行くにも車が必要な状態であると考えられる。これは，車で行かねばならないほど，森林から市街地が離れている状態と，自動車の普及に伴って“どこに行くのも車で”という精神的な弱さを示すものであろう。しかし車で森林に行くことを批判しているわけではない。ただこれについては，森林の近くまで車で行って，それからの利用のし方を考えることが今後の課題になるであろう。

現在，大都市の住民が車で森林休養に来る現象について，行く側と受け入れ側の問題が論議されている。伊那市というひとつのまとまった地域内においても，行く側と受け入れ側の立場が明確であり，今後問題が生じてくる可能性が，この車利用現象から考えられる。

4　生活環境は住民の森林利用に対して，ある程度の影響を与えはするが，必ずしも森林の利用状況を決定するものとはなっていないこと

森林地域の人は森林の近くで生活しているのであるから，市街地の住民より森林との関わりが深いだろうという予想をたてるのは，容易である。確かに森林に近いという環境にあっ

て，住民は下刈り，枝打ち，森林の見まわりなど市街部の人があまり行わない関与を与え，山菜採りなどをする機会も多い。しかし，その環境が，住民の中で生活環境として意識されていない場合がある。住民が森林を利用するかどうかは，生活環境から受ける受動的な影響はあるが，住民の意識が森林に向いているかどうかの主体的・能動的なものが大きいと思われる。

§2　森林に対する住民の利用要求および森林利用に関する意見について

伊那市民による森林に対する利用要求ならびに森林利用に関する意見についてのアンケート調査結果から，

イ）　利用要求は強いが，利用目的が明確でなく，具体的な要求として表われてこないこと

ロ）　生活環境は利用要求に対して影響を及ぼしているが，利用要求を決定するものではないこと

をとりあげて考察しておこう。

1　利用要求は強いが，利用目的が明確でなく具体的な要求として表われてこないこと

伊那市の住民が森林を何らかの形で利用していきたいという要求を強く保持していることは，数字上からは読み取れるが，具体的に目指そうとする利用についての意見においては，その中に主体が存在しないようである。すなわち，“利用していきたい”と答えながら，“どのように利用していくか”という具体的な問題になってくると，自分の個人的な利用は論じられず，一般に言われている事項があげられてくる。したがって“森林を何らかのかたちで利用していきたい”と答えた住民でありながら，今後の森林利用に関しては自分を第三者的に置き，実存しない“人”を主体に置いているため，森林に対する利用要求が森林利用に関する一般的意見にとどまっていると言えよう。

2　生活環境は森林への利用要求に対して影響は与えるが，利用要求を決定するものではないこと

都市の住民は森林，あるいは自然に対して非常に大きなあこがれを抱いており，休日に遠出をして森林利用をしたいという要求が強い。これは“自分達のまわりに森林が少ない”という条件からもきていることであろう。伊那市には森林は豊かに存在する。“そのような生活環境において住民は強いて今後何らかのかたちで利用していきたいと考えるだろうか”というのがひとつの疑問であった。しかし結果として多くの住民が“利用していきたい”意志を表明した。このことから森林に対する利用要求は，森林が少ない・多いという生活環境によって影響は受けはするが，決定されるわけではないと考えてよさそうである。

§3　森林に対する住民の認識について

伊那市民による森林認識についてのアンケート調査結果から，

イ）　森林の認識には，一般論が通用していること

ロ）　生活環境は森林に対する認識に影響を及ぼしているが，決定的なものでないこと

ハ）　森林への関与を非日常的なものとして認識しているにもかかわらず，森林に対して，無限の可能性を期待していること

をとりあげて考察しておこう。

1　森林認識には一般論が通用していること

森林の役割りを考え，役割りの順位付けに関して回答する際，住民は“自分の利用”という主体を存在させていないようである。森林に関する認識が教科書によって誘導され自分の利用形態，欲求から森林の重要性を主張していないと言える。前節では自分が森林に対する働きかけ，関わり方の今及び今後のあり方をまとめたわけであるが，そこにおいては観念的なものであれ自分を主体として考えざるを得なかった。しかし森林の側について考える設問になると主体は消え一般論がクローズアップされてくる。これは，自分達の今の利用あるいは利用要求に自信がないことを示すとともに，森林地域の住民の生活パターンや森林についての認識が，市街地，都市部の住民のそれらに類似してきたことも表わしているのではないか。

2　生活環境は森林に対する考え方に影響を及ぼすが，決定的なものではないこと

先にも述べたが，森林に近い地域の住民は生活環境という点では森林に恵まれている。しかし森林の役割り認識については市街地の住民と類似の傾向を示した。生活環境の差異は住民に森林利用の可能性を提供するが，住民が本当に利用するか否かによって森林認識は異なり，また住民が森林を自分の生活にどう位置付けているかによって大きく異なると考えられるため，生活環境のみが森林認識を形成する決定要因ではないと考えられる。

3　森林とのかかわりを非日常的な特別のものとして考えているにもかかわらず，森林に対して無限の可能性を期待していること

森林そのものに重要性が絶対的に存在していると考え，自分が関与していることにおいて森林の自分に対する重要性が生まれるとは考えられておらず，森林に対する期待が自分の利用経験，生活体験から生じたものでなく一般通念が住民に行きわたっているものと考えられる。

現在よく言われる森林の価値，あるいは森林の機能は人間，それも“自分”という主体なしにして，また主体の行為（利用）に先行して絶対的に森林が有し備えているものなのかどうかを今後考えていく必要があろう。

V　伊那での緑地問題についての一提言

今回，“地方都市での環境・休養緑地問題は，緑地の量的な豊かさに隠されてはいるが，住民が地元の森林を自分達の生活の中でどのように位置付けているか，あるいはどのように考えているかという住民の意識および認識の中にこそ危機性が内在しているのではないか”。という仮説をたて，緑地のうちで大面積を占め，生産緑地としても，環境・休養緑地としても成立しうる森林にしぼり，伊那市住民を対象としたアンケートによる“森林に対する意識調査”を行った。その調査結果から，住民の森林利用現況，住民の森林利用要求，住民の森林認識それぞれについて考察を行ってきたわけであるが，これらを住民の意識の側の視点から見た環境・休養緑地問題としてまとめると，次のような問題設定が可能であろう。

まず第一に，森林が面積的に確保されていることは，住民の意識の中に内在する危機性を隠し，人にさも問題がないかのごとく見せかけ，安心感を与えるものであり，決して問題が

存しないという証拠にはなり得ない。

"森林に近い"，あるいは"量的に豊かである"という生活環境は，住民に対して森林利用の前提である"場の設定"条件を満たし，住民の森林利用形態，森林に対する利用要求，森林に対する考え方に大きな影響を与えてはいるが，実際に利用する主体は住民であり，その住民の意識を森林の方に向けるには有効ではなく，本当の意味での森林利用を必ずしも実現させるには至っていない。

過疎状態の山村に比べ，この伊那市の住民は市街地に通勤可能であるため，生活基盤として森林に真剣に取り組まなくても生活していける。したがって生活や住民の意識は市街地の方を向いていて住居近辺の森林に背を向けていても住民は生きていけるわけである。これは，生活基盤を森林に求めざるを得ない山村地域とは異って，市街地と結び付いて生活し得る地方中小都市独特の問題であると考えられる。

第二に，地方都市の住民でさえ自分の森林利用体験を媒介とせずに森林を認識するため，住民自身の森林利用と住民生活の中における森林の位置付けには大きなギャップがあることがあげられよう。

住民は自分達なりに何らかの利用を行っているはずである。しかしその利用を自分の生活の中に位置付けないで，特別な行為と考えており，また自分にとっての森林の重要性に先行して，"森林はなにしろ重要だ"という一般通念から森林をとらえている。住民が自分のおこなっている利用こそが，自分にとっての森林の重要性であることに気付かず，自分の利用を特別な行為として考え続ける限り，森林そのものも，何か重要であると言われつつ，どうして重要なのかが論じられないまま終ってしまうだろう。

この問題は，地方都市に限らず，大都市における問題でもあるが，とくに　まだ森林が豊かにあるにもかかわらず，住民の意識が都市型に類似している点で，地方都市独特の危機性であると言えるであろう。

第三に，地方都市内部においても都市と農山村間で生じている利害意識の対立が存在していると言えよう。

伊那市は，全面積の60％以上が森林であり，面積的には豊かであると言われながらもその内部には"山菜などは木材とは別のものだから，自由に採っても良いではないか"と言う市街地住民と，"山菜も林産物であり，自分達の山を荒されては困る。"という森林地域の住民の間には利害意識の対立がみられる。このように，森林に休養などの目的で行く住民側と受け入れる側との関係が，ひとつの伊那市という地域に同時に存在する現状は，地方都市独特の問題として考えていく必要があるであろう。

地方都市の緑地（森林）は，量的な面では決して問題視されないが，住民の意識の側から見ると，以上のような地方都市独特の問題を設定することができた。

結局，地方都市の森林に関する危機性は，森林に対する住民の意識の中に所在しており，とくに，

イ）住民の意識が森林側に向いていないこと

ロ）住民の意識が一般通念によって形成されていること

が，大きな危機性であろう。この危機は，第一に，地域住民の林業に対する意識を低下させ，地域住民の林業的干渉を低下させ，第二に林業的干渉がされなくなることによって，住民個

人の具体的な利用を減少させ，自己の問題として森林にかかわろうという行為の低下を招いている。このことはアンケート結果や伊那市近郊のアカマツ林を見てもわかるように，住民は下層木がうっそうとし，下刈りがされていない森林に入ることは好まない。またキノコなどの林産物も，手入れが良くなされた森林ほど生産性が高い。とすると，林業的干渉は他の利用目的を増大させる可能性を増大させる意味を持っていると考えられる。

このように，今後森林を生産緑地・環境・休養緑地としてさらに展開していくためには，林業的干渉が，他の利用に与える影響を知り森林という土地利用の有効性を高め，地方都市独自の森林あるいは森林と地域住民の関わりを確立していく必要があるだろう。

おわりに

本報告においては，地方都市の緑地問題を解明する研究の基礎的段階として，まず，地方都市の緑地問題を住民の意識側から見ていくことを試みたが，

イ）アンケート調査の限界性

ロ）住民の意識構造の複雑さ，および森林という定義し得ないものを対象とし，なお人間の森林に対する働きかけという抽象的なものの解明が必要であること

ハ）地方都市に関する研究が少なく，地方都市の森林のあり方の将来性が見通せないことなどによって判断に苦しむことが多く，充分な推論をなし得なかった。

今回の報告では

イ）緑地問題といえば緑地の量的な減少，あるいは林業問題，農村問題としてとらえられてきたことに対して，住民の意識の側から，問題を設定したこと

ロ）緑地（森林）保全という言葉や，保全対策など，大都市で考えられてきた考え方そのままを，地方都市にあてはめようとしていることに対し，地方都市独自の問題性を指摘したこと

ハ）地方都市には森林に関して，山村や大都市における問題の合成ではない独特の危機性があることを明確にしたこと

など，新しい視点での考察を試みたわけである。

今後，アンケート調査の正当性を吟味し，より客観的資料を求め，研究を進めるとともに，今回主張したこの地方都市における質的な緑地問題についての解明を進め，問題解決のための対策を考えていく必要があるであろう。

この研究を展開するにあたり，多くの方々の御教授と御協力をいただいた。とりわけ信州大学農学部森林経理学研究室の菅原聰教授には，終始御指導いただき，また調査に関しては，伊那市長をはじめ伊那市役所の方々，および同研究室の細井敏代嬢はじめ学生諸氏に大変お世話になった。御指導，御世話いただいた諸氏に対し，ここに記して深く感謝の意を表するとともに，この研究に対する御指摘，今後の御指導をお願いするものである。

参 考・引 用 文 献

1. W. E. S. Mulch : Public Recreation in National Forests : A Factual Survey, Forestry Commission booklet No. 21
2. 伊那市役所：伊那市総合計画　基本計画　1979
3. ――――：統計要覧　いな　1979
4. 国土庁地方振興局：地方都市問題懇談会中間報告　1976
5. 奥田義雄：地方都市その現実　勁草書房　1971
6. 社団法人伊那青年会議所：第二次総合アンケート調査報告書　1979
7. 菅原　聡：森林休養行動の実態，信州大学農学部演習林報告　第16号　1979
8. 高橋秀男：地方都市における緑地保全に関する基礎的研究，信州大学農学部大学院農学研究科修士論文（未刊行）　1979
9. 吉田　昇・神田道子：現代女性の意識と生活　ＮＨＫブックス　1977

Untersuchungen über Wälder und öffentlichen Grünflächen in Kleinstädte (I)

——Befragungsergebnisse nach Bewusstsein der Einwohner über die forstliche Umwelt——

von Hisayo HASHIMOTO
Institut für Forsteinrichtung, Ackerbauwissenschaftliche Fakultät, Shinshu Universität

Zusammenfassung

Die heutige Zeit hat nun infolge der Technisierung und Industrialisierung die Erholungsfunktion des Waldes in Stadtnähe zu einem wichtigen Problem werden lassen. Aufgabe der vorliegenden Untersuchungen ist es, am Beispiel der Kleinstadt Ina-Shi Nach-frage nach Bewusstsein der Einwohner über die forstliche Umwelt zu gewinnen. Die Kenntnis der Nachfrage gibt der Raumordnung und Landesplanung bedeutsame Aufschlüsse. Und forstpolitisch lässt sich die Kenntnis der Nachfrage zur Verteidigung des Waldes gegen waldfremde Inanspruchnahmen verwerten.

Die Befragung werden für der Einwohner in Ina-Shi durchgeführt. Die richtige Formulierung der Fragen was hierbei sehr schwierig, da alle Bevölkerugskreise in gleicher Weise angesprochen werden sollten. Bei der Ausarkeitung des Fragebogens hat uns Dr. Ishida, Prof. Dr. Kitamura und Prof. Dr. Sugahara in dankenswerter Weise unter-stützt.

Aus einen Teil der Befragungen ergibt sich folgendes ;

1. Welchen Ort bevorzugen Sie, wenn Sie einen Ausflug machen wollen ?

	(1)	(2)	(3)	gesamt
Wald	9%	8%	3%	7%
Alte Kirche	21%	29%	28%	25%
Weiter Sandstrand	5%	7%	4%	5%
Bergwiese	11%	7%	10%	9%
Offene Berge	32%	29%	32%	31%
Hochgebirge	0%	0%	0%	0%
Seelandschaft	17%	14%	20%	17%
Anders	3%	3%	1%	3%
Keine Antwort	3%	3%	2%	3%

dabei : (1) ist Stadtmittegebiete
(2) ist Neusiedlungsgebiete
(3) ist Berggebiete

2. Machen Sie gern einen Spaziergang im Wald?

	(1)	(2)	(3)	gesamt
Gern	83%	73%	77%	79%
Nicht so gern	15%	23%	21%	18%
Ungern	1%	0%	1%	1%
Keine Antwort	1%	4%	1%	2%

3. Empfinden Sie irgendwelches Gefühl der Ehrfurcht oder Ergriffenheit, wenn Sie einen grossen, alten Baum betrachten?

	(1)	(2)	(3)	gesamt
Ja	84%	88%	90%	86%
Nein	15%	8%	9%	12%
Kein Antwort	2%	4%	1%	2%

4. Empfinden Sie irgendwelches Gefühl der Ehrfurdht oder Ergriffenheit beim Gang durch einen tiefen Wald?

	(1)	(2)	(3)	gesamt
Ja	86%	91%	85%	87%
Nein	12%	5%	14%	11%
Kein Antwort	2%	4%	1%	2%

5. Ihre Meinung:

a) Wälder sollen von Menschen – zur Wahrung ihrer schönheit – bewirtschaftet werden.

b) sollen Walder ohne menschlichen Einfluss belassen werden.

	(1)	(2)	(3)	gesamt
a)	86%	88%	86%	87%
b)	12%	9%	10%	11%
Kein Antwort	2%	3%	4%	2%

6. Was bevorzugen Sie?

a) Die beeinflusste Natur mit der freien Landschaft, den Äckern, Wiesen und Wäldern.

b) Die unbeeinflusste Natur, die sich aus Urwaldern oder Ödlandreien zusammensetzt.

	(1)	(2)	(3)	gesamt
a)	56%	69%	61%	60%
b)	42%	29%	37%	38%
Kein Antwort	2%	2%	2%	2%

7. Haben Sie sich jemals ganz besoders berührt gefühlt (etwas Besonderss empfinden) bei einen Sonnenaufgang oder Untergang, oder beim Betrachten einer stillen Berglandschaft?

	(1)	(2)	(3)	gesamt
Ja	88%	77%	81%	84%
Nein	7%	13%	17%	12%
Kein Antwort	4%	10%	2%	4%